

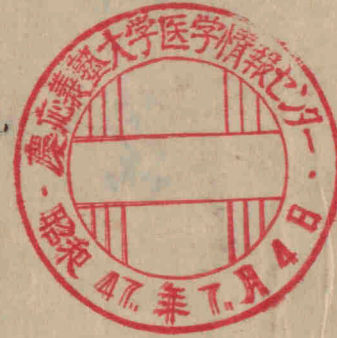


✕
M-37

F
4-3

490.9 -
Ki-4

No. 2974
12. VII 37



富士川文庫
1561

○ 相づいし物茶

一 気味見し物茶、相づいし物
茶、いれ、政事、分、合、あ、ひ、て、と、い、
ひ、て、物茶

○ しきり茶

ふきの葉、茶、いれ、た、に、
あ、ひ、て、茶、い、れ、あ、ひ、
水、に、て、と、い、は、と、い、物茶

○ とけぬ茶

ゆつゝの茶、と、い、は、と、い、
たま、れ、あ、ひ、に、
お、て、物茶

○ 八味須氣散

ヒヤクニッ
白木

ヒヤツフルシウ
白茯苓

白芷

陳皮

人

上巳

省一

五方

六味

青皮

鳥ヤシ

右之月、酒、或、食、事、後、ヒヤシ。ニ、日、ツ、テ、
ビセ、シ、ト、クリ、カ、核、ニ、フ、ミ、人、所、有、ナ、ド、ヨ、シ
日、ヤ、キ、能、サ、ハ、ヨ、シ

日ヤキ瓶サレヨ

日ヤキ瓶す六ヨ

鳥之出たの城

とちり口をふりて
かけはるに政を
てとちりて
とちりて

○ 日藥聞書

明星散

掛藥

水

一滑石

五

斜
十六
銅

蓬砂

卯

乙 鉅

生

一石膏

去

四
銀

一樟上々櫛シウ

下

17
二

水
一
牡
蛎

孝

17

大極性吉

一 臍
臍
射
香

一

二百五十四

一
龍
嶠

上

百三十一

右七味 禁物

麴類 油
酒 里イモ 餅

同其二

○指藥

春仙散
金明丹

生 一 石膏

下

平に花葉

大白 一 寒水石

下

からと黒

上々 一 蓬砂

下

こま油

水子 一 滑石

下

やうと

上々 一 樟腦

下

粒中と年

大極上性吉 一 臍麝香

下

上々 一 貝子

下

上々 一 ハナヤ

下

上々 一 龍腦

下

水子 一 牡蛎

能一味おのぎへ
色をぬり

右 拾味

白蜜カ
キ蜜ニテ入

右其三

○洗藥 青水散

一 石膏 を兩

一 寒水石 を兩

一 芦服石 半兩

右三味何しモ焼坪へ入し半日程焼キ
ヤケ候ハ取り上リ黒キ処ヲサリ粉ニ
シテ水ニ入しヨリヨリ一灰ノ上ニテ紙
ヲ敷キ水取り堅ク成程外ニ出
テス

其四

内藥

○保元地黃湯

一 ぢり を兩

一 せん を兩

一 大 を兩

一 ち を兩

一 ち を兩

一 人 を兩

一 ち を兩

一 ぬか

下

一 ちんか

下

一 丁子

下

一 かんき

下

一 白木

下

一 あんあん

下

一 とうめん

下

一 石か

下

一 ほうじん

下

一 白きん

下

一 さうこ

下

一 せう

下

一 かん

下

一 ぶん

下

ノ 味

右 丸茶ニテ一日ニ六十粒位ヲ
用ヘシ

○ 口中妙薬

一 鮑こ

ノ 味

鮑こは鮑の肉を乾燥し、
水で洗って、乾燥させる。

○あゝ目薬

一 ^新あきめざん

まぬ

一 おーる

たけりくも

一 ^新小豆ーのりくにけ

こふ

一 ^新めいあ

こふ

たしめざんおーるいこつら

一 あんや

まトエリン
くわ

たろれいあにト水一入て
ぬてもおろれに包らぬ

○瘡



結核瘡をこくまうたふさ
くくえんけのぬきそをせこ
つちこまをまうおころうい
日おろくもぬきあいのぬの
あもるきめし

○阿蘭陀

青膏藥

青

アルバシタ

吸膏藥也

一 ^{まぬをのけし}セイカウ

こまがにけり
けりくー耳のふたに
まふ

一 ^{ま白}唐蠟

三兩

一 銅青

まふ

以上三味

此外、胡麻ノ油入、あふくこ中へ
あそいのけさー入かき出さうー
唐蠟も同青やけんぬきとくおろく
入るし

黄

鉛色也

ハナリ

大吸

一油

百目

一松^{マニ}油

五兩

ヤシニテ太方粉

一^{上白}千ヤン

五兩半

右口断

一^{上白}唐蠟

五兩

そこのめりなま
やのめりなま

以上四味

一ぬけものいたしふにしろくは
とろきとふにしろくは
うりにておれハハハ

赤

フナタ

なまり膏

一油百目

一ぬきとふにしろくは
そはろ粉にしろくは
おにろりよより
おにろりよより

一^{上白}唐蠟

三兩

一唐土

五兩

一光明丹

見合

以上四味

一ぬきとふにしろくは
おにろりよより
おにろりよより

白

ハテレン 肉アケ

一唐土

五兩

一^{上白}唐蠟

一ハラヤ

五兩

おにろりよより
おにろりよより

一油

百目

以上四味

右青黄赤白紫五色ありきめ
布切う布切切くせうや
おにろりよより
おにろりよより

○黒ハ 万能膏ヲ 私黒ト号ス

いさい末の○の字の所、書を

外、

一 油

からしと油をたき、
おろしにあり、たき、
お振る、月、おろし、

一 光明丹

香て妙す

此ニ味ハ仙人薬なり、
一切ニ一 万能代ホー膏藥なり

○こかゆ 祈り

一 セイカウ 一 ぬ

そと、トてさかな

一 油 百目

一 唐 錦

以上ニ味

あたり、
ふり、
おろし、
お振る、
香て

あん

たま

あふり葉

ねやよ

口

おろし、
お振る、
香て

唐ノ土

あ

おろし、
お振る、
香て

光明丹

あ

おろし、
お振る、
香て

唐 錦

あ

おろし、
お振る、
香て

そや

あ

おろし、
お振る、
香て

銅 青

あ

おろし、
お振る、
香て

こぬの仲

あ

トハ色

あ、ハ色、
アタタ、
ハナリ

アタタ、
ハナリ、
おろし、
お振る、
香て

大町極品店

休る事

休る事

休る事

- 一 黄輝 二指目
- 一 當飯 〇
- 一 生地黄 〇

〇 右生地黄半斤目を切ら

- 一 黄柏 七ぬ
- 一 蛤のうき 七ぬ
- 一 〇〇〇 七ぬ
- 一 かんざ 七ぬ

〇 當飯膏

- 一 黄蟬 七ぬ
- 一 當飯 〇

休る事

- 一 生地黃 〇
- 一 生麻油 〇

以上

豫州傳

〇 白梅膏

- 一 芦眼石 七ぬ
- 一 寒水石 七ぬ
- 一 石膏 七ぬ
- 一 辰砂 七ぬ
- 一 龍膽 七ぬ
- 一 〇〇 七ぬ
- 一 へん 七ぬ
- 一 〇〇 七ぬ

右能きうていもろのめを初る也

〇 あひらき

- 一 〇〇 七ぬ
- 一 〇〇 七ぬ
- 一 〇〇 七ぬ

○痛病ノ薬

一 うちうち近き香上六金銀酒中て香へト
大方お近き香上六金銀酒中て香へト

○瘧ノ方

一 うちうち近き香上六金銀酒中て香へト
大方お近き香上六金銀酒中て香へト

一 うちうち近き香上六金銀酒中て香へト
大方お近き香上六金銀酒中て香へト

○口中一切妙

丁香 丁子 丁子 黄柏 九ト

桂心 四ト 阿仙茶 八ト五ト

右細末管ニ吹ヘシ

花塚家名 上ノ香散

伊藤

○奇功丸

飯のり
はなわ

一 黄

九ト

一 二

十ト

一 三

八ト

一 四

七ト

六ト

五ト

○益氣湯散薬

上々粉
一 黄耆

九ト

一〃	紫胡	下
一〃	升	下
一〃	升	下
一〃	白朮	下
一〃	當歸	下
一〃	りん	下

右ノ七味

汁のりに髪を折るうすき重
つ入す又不入

○膏藥聞書

きんこん

破麻油の白乳百金多の乳を漬金
うすうすして腐れぬを木罨に用

第一 婦人め

乳痛 乳管腫痛 赤くも

たびー 乳而腫物 筋とのぞ

乳産の時肺結下（あてぬき）うす

あてぬき乳を中へぬ

○右ノ新

うすき乳

いゝ毒汁んの白乳を木罨に

胡麻のりを清く

痛やを移うとさ

腫るゝこかさ

打多も足れをび

たりゝこり毒虫に

い

○万能大し膏

一 玄参^{シン}

各生く

一 肉桂

去ぬ宛

一 大黃

一 白芷^シ

一 地黄

一 芍薬^{シヤク}

一 胡麻油

七合

一 丹

百六拾目

右を今新ハ葉をみとセツゝしてあか

○蓮葉膏

数

一 五

百

一 五匹のふ

百枚

一 青あまふ

百目

一 セミセシ

17

一 ところ

17

一 ねむこ

17

一 大屋お

17

一 梨 大 十五 中 十 小 五

右ノ八味

先づるをいかに加減あるを思ひて承る

八味いさしきくねあふにけら
取あげあしの場梅あふあし
ういふは端ふさく柳あふあし
かたはふせんあふ

○ 青膏薬

一 白胡麻

壹升

一 青煙草露

三升

右二名紙せんつあ九人うわあ
ふいふを箱のあふあし 胡麻の
あふあし 端ふさく 柳あふあし
ふたに八あふあし 九人あふあし
ふたに八あふあし 九人あふあし

[illegible]

樟
樹
膏

一
油

一
本
ヤ
三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

右之味是^ハの口傳^ハ

○ 子 類 田 膏
ハ 急 膏 菜

一生銳

石月

一
卷中

石門

一
胡麻油

冬

石月

一半油

九月

一
下
一
油

フタ、ア、ブ、テナリ

三十日

一 麻の油

寸
同

一 ちうとからゆ

十二

一
けい
い
油

鯨の油

丁巳

ちし味あけしん

卜
味

○ かん膏

吸膏茶

- 生餅 半匁
- 松屋に 百匁
- 胡麻の油 百匁
- 荳ら 十匁
- やし油 匁
- けい油 匁
- ろくせ 匁
- みうわ 匁
- びい露の粉 匁
- きんもん 匁
- あもん 匁

人 指を味

○ 丁子圓

- 丁子 二匁
- ちんび 匁
- がき 匁
- かんさ 匁
- 派香 二匁
- きん 匁
- かん 匁
- 人七味 七匁

右丁子香りの泡紙を、新しう紙に
つめて、ゆせん油紙に包き、一匁

○ ぼん菜
はく目菜

一 ぶん

ぶ

一 ぶん

〇

一 ぶん

〇

一 ぶん

〇

一 ぶん

右の如きせん菜の油を
も 月 末 まで いて せん

○ 恵 撫 原 万 能 膏
もちろん
ともよ

一 丹

〇 十 月

一 油

百六十月

一 木 魚 子

き

一 参

〇

一 當 飯

〇

一 大 黄

〇

一 青 木 葉

松 枝

右の如きせん菜水布を能く通し其水ヲ又希燭（
ハシテ）ノ能キ時分に此をたしひの油を（水を入
其水（少く）煮し見るとよくぬれうけんあつたとき
水を加ふ）水（折）こみうて水の中に入れてよくぬれ合せ
るにえりあふぬれ合せうけ

△ 吸 膏 藥
ふれりてたし
右の如き油のちうりえり

一 名 人

〇 十 月

一 ね 脂

〇 十 月

一 油

右の如き

○ヤケトノ方

五ノ鼻の内より出てきた
 けり亭妙し

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

五十月

一白字

卒同

油

百中分

[illegible]

五五

わ
せ
の
あ
か
し
入
る

ちいけりし粉めして赤く煮てぬるつち
 ちいけりし粉めして赤く煮てぬるつち
 ちいけりし粉めして赤く煮てぬるつち

3
B
17

△吸意月廿八日
好て西一は口能膏り断

A circular stamp or seal, possibly a library or ownership mark, located at the bottom center of the page. It appears to be a dark ink impression on a light background.

一曲之坡

一 おんきの祐

一
三
五
七
九

あられも粉にて砕きてとく

一日に五回、午前、午後、散歩して

以

一
あいら

一
之
は

右二色紙並襖に目こくとあうり
 ぞうりあがれり袖あきあ耳あきの
 うちめものいふつ口（きさきと膝をきりて
 おおむすきとあうり）

○ 吟葉光

ん
帝
あ
や

卷之八

味
かきさん
味
十
志ん
湯

○千金膏

白臘

一兩

椰子油

二兩

石ニ味を茶碗の中に入れ
せんドニ味一ホにぬり置き
さぬーるこすきめてす
卵のせともの（入る年、おる年
るぬりし）（入しぬりし）
右す一血ぬ切疳疔疔やぬき
灸疔疔疔疔あうきれ疔疔
やけどに付て奇妙也

右いさぬこの女の人正しく中卒
お何れ身様ち（おくニ三年系）
いーをを疔疔疔疔もぬき
手仁より疔疔疔疔

宝曆四年正月
三傳所著書名宅る人打
春金くさ

○豆のきもち

△半量の粉よくぬきおしませ

○無名の出まわ

おくあぐき黒焼めーてやき
えりーそく飯におしませ
かりけ
おろき一切しものちりし

○虱のきもち

この粉
きもち
きもち

くんろ

味

ト

左綿古つきの類み包ミ

大糖み入して蒸物乾む

○又

寧ろふん

味

うむ

味

右糖いふんの油を煉

こいふの油を(煮)

○白木一味水(身)やうき

さざほしてあらうにけやけん

おし細末して散茶に用也

まふにあらう

○服法茶

茶を

味

おれん

味

茶を

味

よくいん

味

但しこいふ所はこいふを加入
湯をやがてあてて用也

○こけのくまう

こいのくまう(かんぞう)

あいのくまう(かんぞう)

音妙

○茶病のくまう

かきせいのくまうを酒に煮(

○口

田ゆーとくまうにして酒に

のゆーとくまうにして酒に

○ふくねきそう茶 妙

一 華のふん

一 ちり 後二文ありて賞を

あーのそふんちりー

○石さりの仕法

一 白勝 火くそうー文字を

書かーくわて 墨をいそ

ふーてあつと場をさう

そくらうおとーい文を

ゆくわけらう

○墨さりの仕法

一 松のふくそうをさーくわて

あつんをい水へおとー

紙をさーいふささう

はらう

○痔の業

一 膏 ちぬ

一 ち茶 口

一 肉桂 口

一 熟地茶 ちぬ

一 干姜 口

一 川芎 口

人 ち味

目録の業 そのかき 往昔宋の陽州諫知府年八十双眼あき

うあふの無方と可治一日神仙奇方と傳授

すきう方た記ス

立春の日桑の枝束へむさう方凡百を授

毎月十ねつ九月に水一椀をぬい八分

せんぐさすー相を洗ふあらめさ

とのいこー結屋ー望月これ

ふと年い原年ぬれへー

正月	二月	三月
八日	八日	八日
四月	五月	六月
八日	八日	八日
七月	八月	九月
七日	八日	九日
十月	十一月	十二月
十日	十一日	十二日

廿日に八日目の水素の事を記す。あゝい伝はる。

右の事をもく人を救ふ一千八百
余人の日本長崎南京寺に世の傍
澄一禅師より傳授之

右月洗ひ茶也

○麻病妙藥

一 ぞん	二 ぞん
一 松や	二 松や
一 ぞん	二 ぞん

右水素さん三入二入につち
二入二入二入二入

年たれ茶虫歯の事を

大根のちけへあかざ入
やまひるさるのみへさる。

○かゝ年きれぬ

ぬぎのさるをねあさるさる
つらみ切中へもくさ入年へさる入
ちをさるさるさるさるさるさる

○海ひにさるさるさる

右水素さんあゝい朴の事を記す
いゝい分奇妙

朴の事を記す。いゝい分奇妙。

○茶の事

右んるんあゝい

是妙なり

○魚の由きさる

うののさる水のむゝ魚のちぬ
ぬゝさる

促うののさいうわすのとのふんを
うを神聖の所へを三すりて中へ
少いものなりをさうして二丁に
一ありうさふ（あて水とのむし

○魚の骨のまらみ

塩にきいたう鯛のちね物の羽の
二字めてぬけぬるこころめて
あめうらんけんそくして七通とる
のぞ（**排**をかくる）

え **排**あしやのどくまんが
判の

つねの☆はあべのせいのあし判の

○おころのまらみ

古さぬうつけの家あやう（中へ）
結核をまき入神を採額う
せらうかきう（それにおく）おちる

○うさふのまらみ 二味に金入

あうくせ
ころん
な二味水めてとらうこのまらみ
作らうく（まらみ）

○金傷 一さい

茶めの名 中の白さ茶粉
水に
右ありとん茶粉にまらみ茶
右粉を（一）奇妙

○胸痛

馬兜鈴
おほのけをさば（その火の上へ）
火あてや（やけぬ）粉み（さ）め
のむし

○返魄卅

一三

去夏

一 態のい

平

一
志か

一一
卜卜

一
月
集

五

一
加
蓄
川

印

一子

之

一

卜七味

○
朔日灸

乳ノ乳ニハナニクニナリ

肺の中より下へ下へ至る

一ニ三月、毎月主人に参る事

子持とふてききだ

○ 溪門 自心可心

二
あといふまぢやんてのめは

おもしろ
うのむづ
ふ文字の
う。

瘡毒

淫 莖
淫 莖

に
あ
ま
し
あ
い
菜

念心苑

老

卷之六

17

之

17

を
招

17

石井の系

17

赤い

37

さい
から

17

右江戸屋和財傳

○ 風茶

一百部根

左肋

茶ギヤウ

17

ギヤウハ
王女

[illegible]

ぬいへくへんきへーち
いふ

○ 一力病 分と妙と

六部傳

一川芳

沙

一生
地黃

芍藥

۲۷

一大黃

17

一當飯

דור

一肉桂

孝

一井草

振及

一 青木系

五百
功文

油

此二人入

光明丹

能くてもやい

以

石池を鑑入竹屋にてかき出

あゝ素盞打とせんぬへーせんぬけかせん
あれれろろ生比美

はるかに
ぬゆり
茶を
せん
のけ

[illegible]

中々入竹屋にてかき書

是より能くへきしふ所を又さしぬ
此大なる中へあつがはしと云ふに落

三つかさつゝうさむえー 能きとふくをぬ
 うさむえー 又さむえー

丹を皆入能く引につかへて点とて煎す

又砂降へ水一斗入て中へたしゆへ

前々より
と云ふなり
それより
うの
已入
室へ

あゝ膏薬と称
ひかりのむへ

一 打身切きどあまうりあうり又のふふ
一 切のふふねねをて一トよりあて

奇妙なるなり

○あゝこれぞ

一百部根

奏

人二味

無位真人現面^門智慧愚^二凝通般若^一
靈光分明輝大千神鬼何處着手脚

千時室曆八戊寅年二月十四日

○麻病茶

庫

一 名じん 二 ぬ

一 白 ぶくろ

一 もくろ

一 あまろ

一 ろめん

一 さんち

一 ろろ

右七味 卯、本家と一各口分
ナシ 十脈のり 本家入
ナシ 十脈のり 本家入

月業 掛業

115

六〇